特67

399

高野聖
九度山

真田古誌

025450－000－2

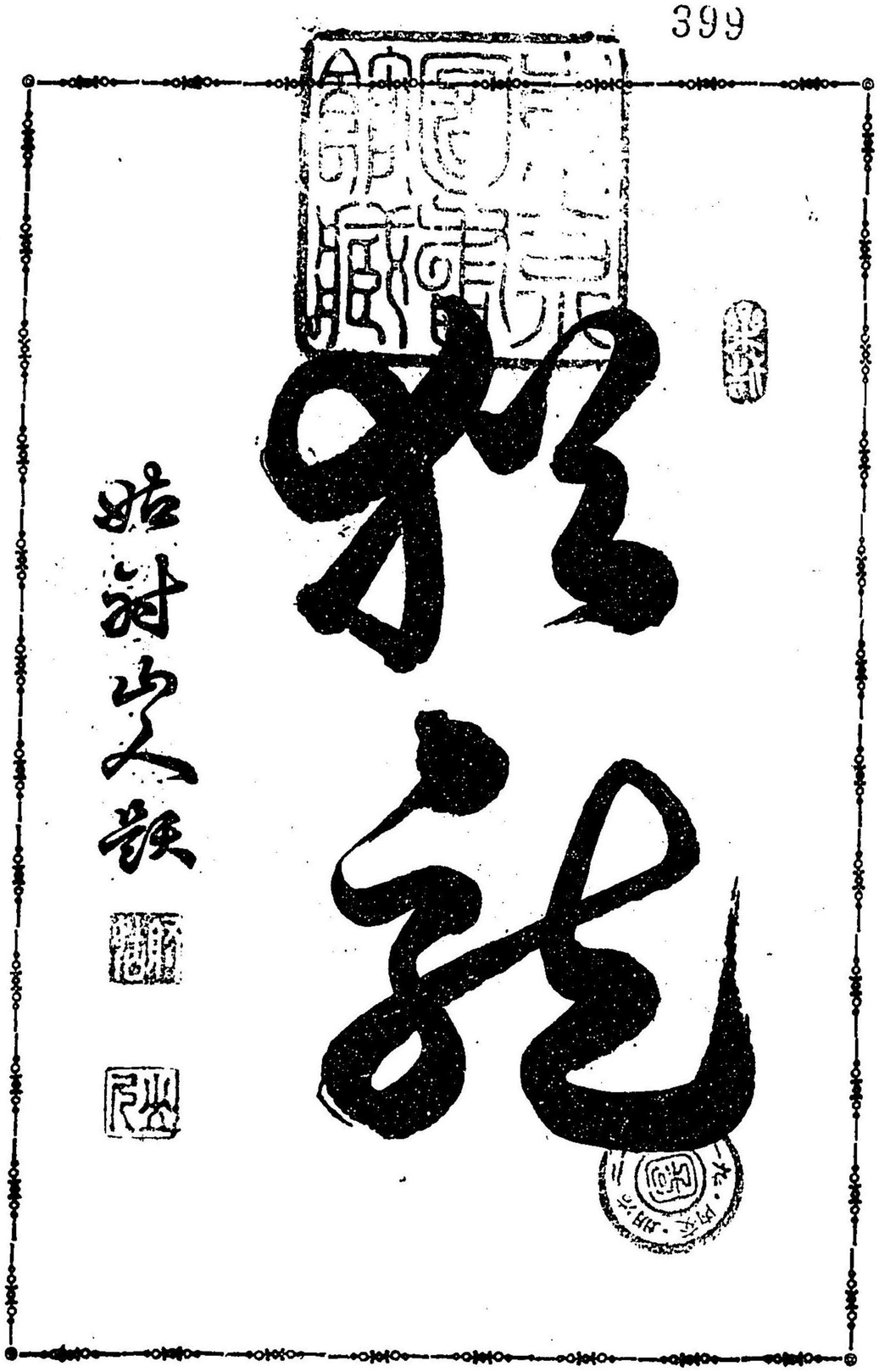
特67－399

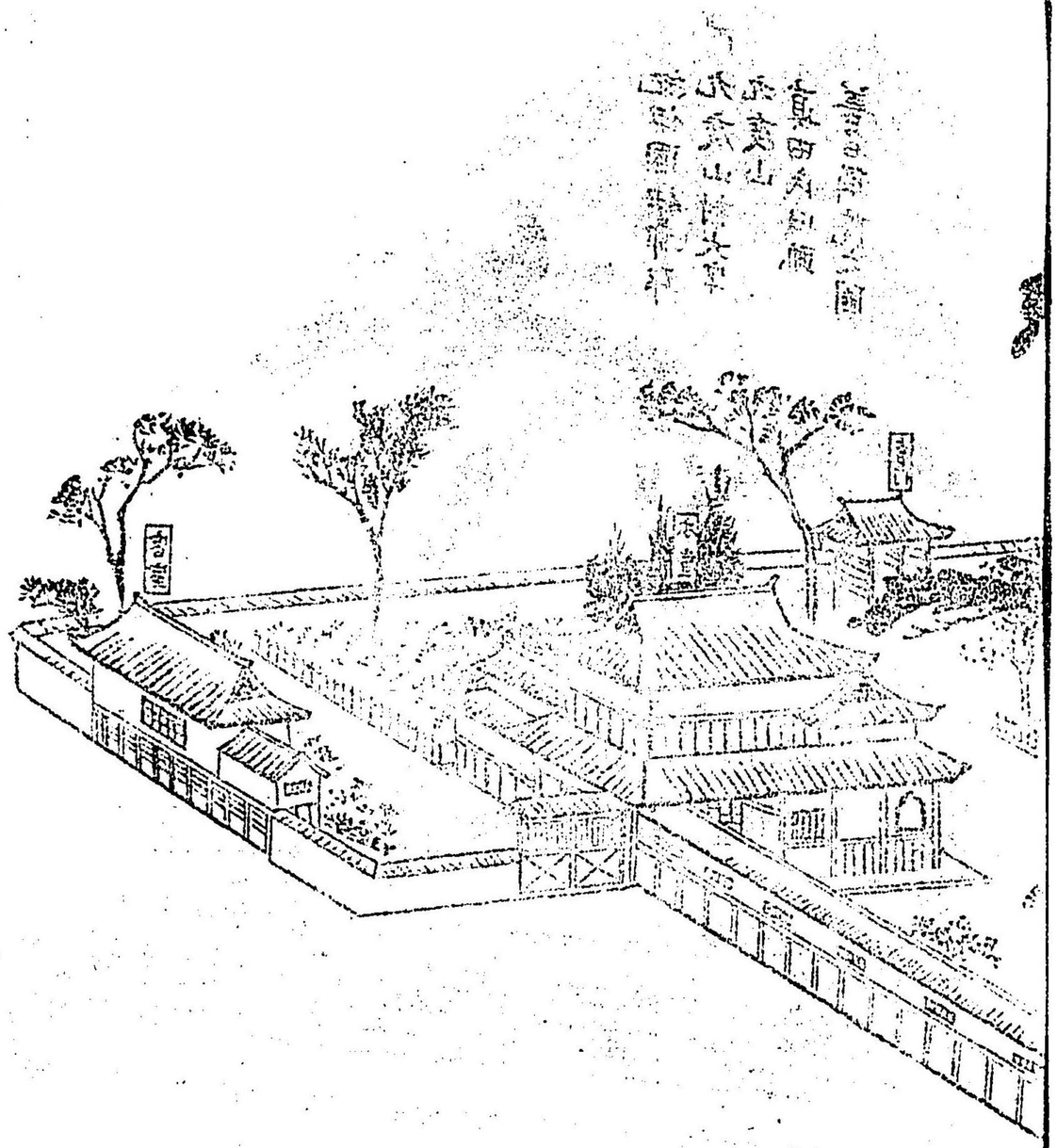
真田の古誌（高野聖九度山）

井村　米太郎／著

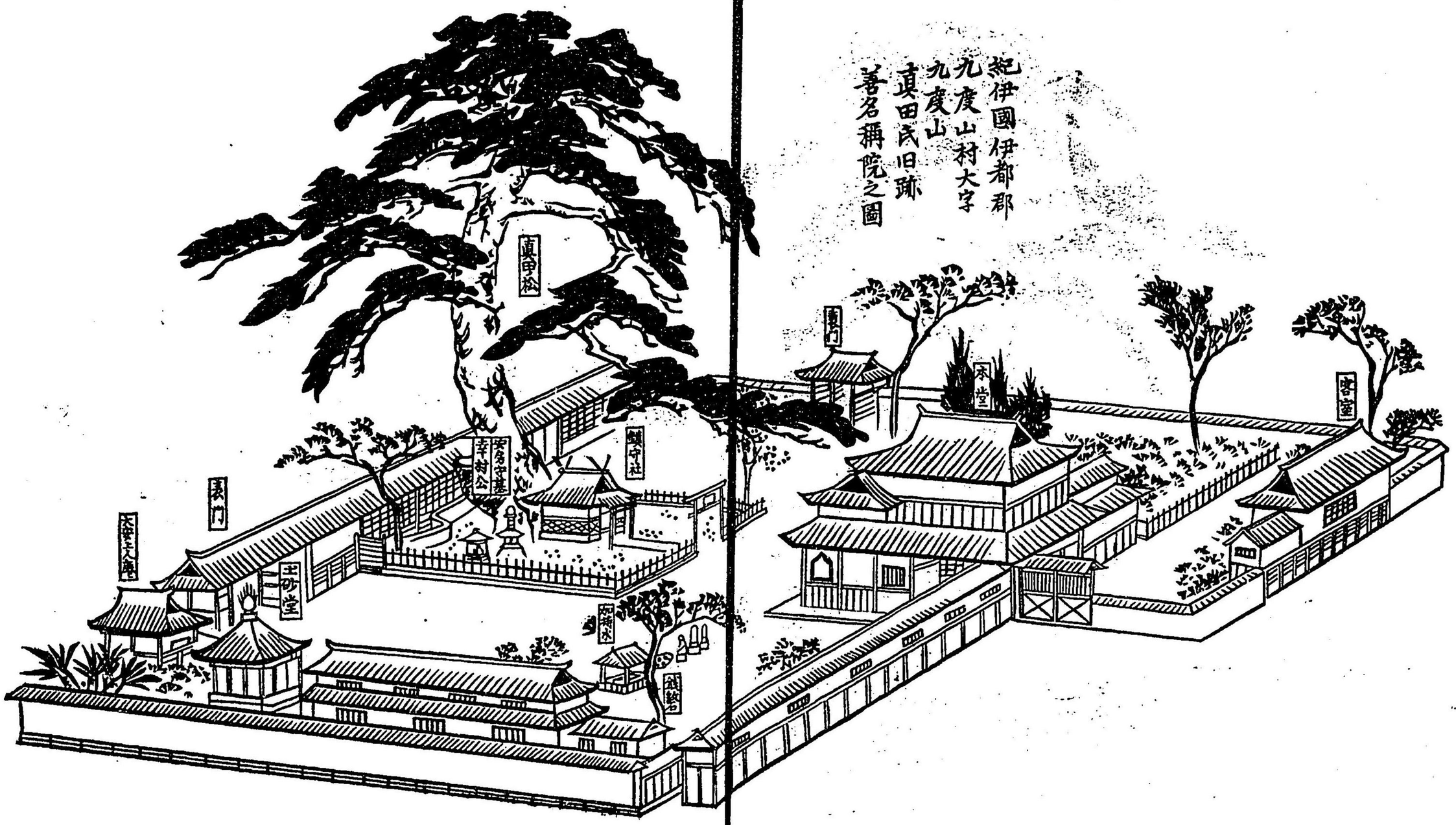
M27

ADC－2902


姑射山人敬



紀伊國伊都郡
九度山村大字
九度山
真田氏旧跡
善名稱院之圖



眞田の古跡

○眞言宗金剛峯寺末 佉羅陀山善名稱院 紀伊國伊都郡九度山村大字九度山

○本尊地藏菩薩 本堂に安置す

○鎭守社 地主大權現稻荷大明神金毘羅大權現天滿天神住吉大神

○地像尊、石像 小像厨子に安す是は幸村大阪入城の時自身に代りて父の墓所を守るが爲其傍に建立する所なり

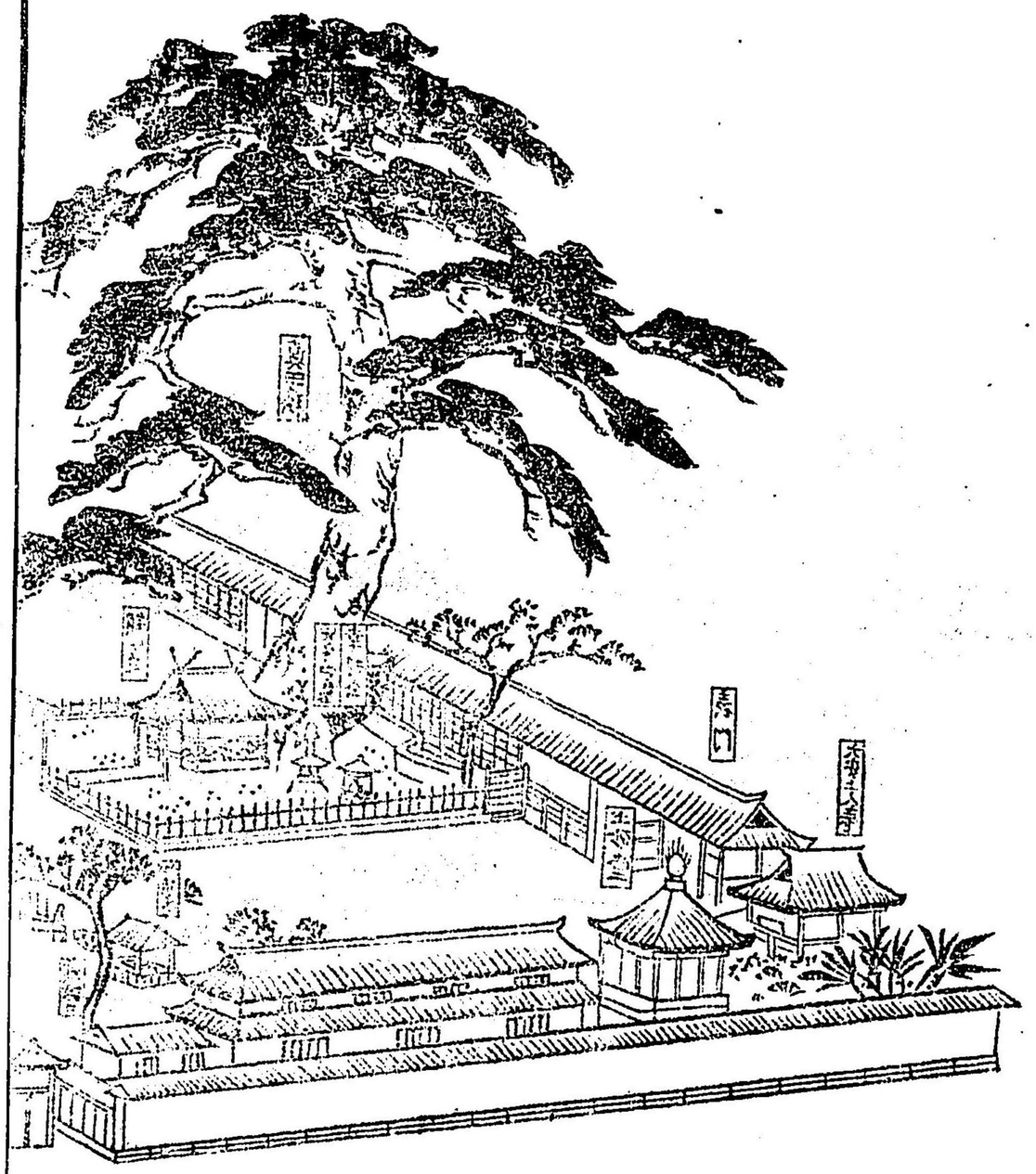
○眞田安房守ノ墓 小寶筐印塔幸村の建立

○大安上人、廟 當院開基の大德也

○土砂堂 彌勒菩薩を本尊とす大安上人建立して加持せし土砂を納む

○加持水 大安上人の堀所の非なり

○眞田、松 墓側にあり數百年を經たる老大樹なり



押りて

雲まがと潜みし龍のいろくづも猶忍ばする松の一本 眞琴

武士の鑑とや見む霜にだにしをれぎる立る松枝の月 同

○什寶

幕 安房守の船幕なり

鐙 幸村水練に用ゐし物也

紙製ノ犬 安房守息女お市の方幼少の時其翫弄に自ら製して與へし物なり

楠公ノ位牌 開基上人は楠家遺臣の裔なれば納めしなり

同印形 馬を彫れり是補公

七十七歳 志道

の生成巳午なるが故

思ひきや松をとひ來て橘のさらに昔を忍ぶべしとは　墻柳

○眞田淵紀の川にあり幸村俤に水練を試みし所なり古來此川出水多くして淵瀬の變極りなしと雖ども此淵のみは依然たり

雲を起し浪まく龍も時待としばしは淵に身を潛けん　眞琴

○眞田抜穴紀の川の支流丹生川の東岸にあり横穴空洞にして自然に成れるが如し此より紀の川へ凡七八丁地下を穿ちて通ずといふ

善名稱院は眞田氏の舊跡也、其由來を尋ぬるに、眞田安房守昌幸は信州上田の城主にして、其先　清和天皇の皇子貞元親王より出、父彈正忠幸隆に至て甲州の武田家に屬し、智謀を以て世に顯はる、彈正入道して一德齋と號し、天正二年五月十九日卒す、長男源太左衛門信綱、次男兵部丞昌輝、は長篠の役に戰死し、三男安房守家督を續げり、安房守亦智謀拔群を以て稱せらる、其彈正の世より武田家の爲に戰功を立しこと校擧に堪へ

ざ、信玄卒し勝頼の世となりて跡部長坂等の佞奸君を蠱惑し國を擾し忠言渾て壅蔽して知謀を施すに地なし、されば織田德川氏等の爲に漸く四境を蹙められ、遂に大將勝頼據る方もなき迄に窘迫せられたり、時に小山田義國、勝頼を執へて織田家に市んと欲し、其邑岩殿より入んとを勸む、安房守之を危ぶみ、吾邑吾妻に迎へて籠城し死を以て守らんと請ふ、二龍跡部長坂の曰、眞田は新附、小山田は旧臣也、旧を捨て新に依るは理なしとて、岩殿より入んとす、小山田忽ち反旗を翻し銃を發して逆へ擊、是に於て進退窮り、終に天目山に入り、嫡子信勝等と四十人悉く戰死し、武田家全く滅亡せり、殘黨或は降り、或は誅せられけるに、獨安房守居城に據て大敵に抗し孤軍を以て能く守る、次男與三郎、後左衛門佐と稱す幸村此時十三歳、屢々奇計を以て敵を惱せ

り、後織田氏と和し、羽柴秀吉に深く結托す、秀吉殊に與三郎の奇才を愛して厚遇す、天正十七年關白秀吉公北條家不廷の罪を征さんと欲し、諸將を會して軍議し、地圖を開て其向ふ所を部署す、此時安房守末席にありければ地圖を窺ふことを得ず、口を閉て和へたり、忽ち豐公安房守を呼て曰、此度の征討、海道の先鋒は家康に命じ、山道の先鋒は汝に命ず、と、諸將相見て茫然たり、安房守大に感喜し、私に謂て曰、殿下の一言、我に於て百万石の封を得しよりも榮とす、是平生德川公とは其中善からず、然るに德川公は豐臣家の客將にして諸侯の上班に在り、加之大國の諸家濟々として數多あるを措て末席より拔擢せられ、德川氏と力を競ふことを得れば也、實に一快事と謂べし、翌年大軍以東征するや、山道の先鋒として諸城を陷いれ、軍功

最多し、慶長五年上杉中納言謀を石田三成に通し、會津に反旗を立るや、德川内大臣怒て天下に令し、諸將を驅て東征す、安房守亦一族を率ゐて出發し、德川公に會津に會せんと欲し犬山に至る、時に石田等秀頼公の命を以て諸侯を集め、兵を擧て遊に上杉氏に應じ、狹て家康公を擊んとす、因て檄を飛して安房守を招く、是に於て安房守、子弟に各其意見を問ふ、嫡子伊豆守信幸、及弟隱岐守信尹の曰、吾等關東の殊遇を受く願くは東し て德川公に從はん、二男左衛門佐幸村の曰、太閤の舊誼背くべからず、寧ろ西して亡ぶるも東して活るを欲せず、と、安房守曰東せんと欲する者は東せよ、西せんと欲する者は西せよ、而して吾は西に從はんとて、此より父子兄弟東西に別れ、吳越等となる、德川氏平生伊豆守等を寵遇し、本多忠勝の女を養ふて我

子とし、之を伊豆守に妻せり、是を以て其東に從ふや亦理あり、又安房守等は、太閤の恩義を重んじ、此度の擧たる、縱ひ石田等の私心に起りしも、秀頼公に奉書を以て徵されしものを、之に背て關東に與し、反て弓を大坂に彎の義は有べからず、且此擧たる豐臣家に利ならざるも、事茲に至れば復已べからず、利害は今更問ふに遑あらず、唯義に是從ふのみ、かの德川氏の狡手段に籠絡せられて、亦を旧主に向け、功名に誇るに徒と、胥壞果して幾何ぞや、扨安房守は左衞門佐と上田に歸り、城に據て東軍を妨げんと待構ふ、德川公は少將秀康卿を以て上杉の押へとして江戸に歸り、山道の大將として、中納言秀忠卿に榊原康政、本多正信、大久保忠隣、酒井忠利、眞田信尹、同信幸、等を附し三万餘騎を以て先發せしむ、八月廿四日秀忠卿諸軍を率ゐて下

野を發し、九月二日小室に至る、然るに上田には籠城して途を塞きければ、秀忠卿、伊豆守に命じ安房守を說て招かしむ、安房守聽かず、東軍怒て、城を打破て通らんとし、急に攻かゝる、城中千二百餘騎、能く防ぎ寄手利あらず、左衞門佐、奇謀百出、散々に寄手を破り大に惱せり、秀忠卿大に心をいらち、かくて日を曠くし、若し上方の戰に後れなば實に一大事也、且かばかりの小城に此大軍を支られ、何の面目有て海道の諸將を見ん、今は悉く戰死するとも猶豫すべき時ゝ非とて殊死して攻れども、城中泰然として動ぎる色なく、却て東軍殺傷を增のみ、或は途を替て進まんといふ者あれども、秀忠卿、途を替るは恥辱なりとて聽ぎれどいつ果べくも非れば、終に其說に從ひ、仙石秀久、森忠政、を押へとして留め、途を替て西上せり、時ゝ家康公、九月朔日

江戸を發ちて海道より上り、十一日清洲に至り、軍を止めて山道の軍を待合せども來らざるを以て、家康公意を決して進み、十五日關ヶ原に於て西軍と會し大に戰ふ、小早川秀秋等戟を倒にして西軍を衝に依て西軍崩れ立、終に大に敗績せり、尋て諸城を陷いれて東軍凱歌を奏し家康公大津に留りて殘務を處置し、將に上洛せんとす、此時秀忠卿漸く着す、かく期を失せしを以て、家康公大に怒り、見ゆるを許さず秀忠卿涙を垂て出、榊原本多酒井大久保等亦見にんとを願へども皆許さず、諸侯種々に陳謝して漸くに聽されたり、うれ關ヶ原の役や、眞田氏一手を以て東軍の片腕を執へしなり、かくして西軍に勝を恣にせしめんとせしかども、奈何せん西軍は、石田氏猿智慧自ら謀主を氣取て我意を張ければ諸將一致せず、大軍なりと

雖ども既に天の時、地の利、人の和、皆之を失せり、其敗るゝや怪むに足らず、扨上田に在ては、西軍既に敗れし上は誰が爲に守らん、暫く潛て天下の動靜を觀、時を待て爲す所あらんと一決し、隱岐守伊豆守に依て城を渡し、兵士を散じ一族を率ゐ、股肱の臣數輩を從へて、紀州高野山に遁れ來る、時に十月九日なり、乃ち三里麓、九度山村に草廬を搆て閑居す、其邸地は即ち今の善名稱院是也、穴山小助等股肱の臣は別に住居す其家系今猶あり又安房守夫人は同郡河北一里許を隔てし丁田に住す今平岡氏とて其舊跡あり想ふに一族處々に散居して可成人の目に觸ざる計をなせし者ならむ又當地に松山又兵衛と云家今在り眞田氏當地に着せし時先此家に落付しなり福島正則よりの書狀を藏す　此年或は翌年ともいふ　左衛門佐一子大助生る、爾來左衛門佐家僕と共に野に出て耕し、又は木綿の絲もて紐を組て生活を資く、其紐後世眞田紐と稱し今に需用多し、かく生計に餘念なき躰を示せしは禍に遠ざかるの遠慮なり、然して夜は孤

燈を挑げて顧眄に眼を曝し、時に天象を觀て時運を推し、或は野馬に跨り紀川に鞭ちて水練を試み、（真田淵あり又鎧あり）若くは火器（帖貫の大礮銅遠花等）を工夫して豫め軍用に備ふる等、用意最も周密なり、蓋し當時吾邦未だ大礮の製及び地雷火の術を知らず、然るに左衛門佐之を發明せり、是を以て視れば唯軍略の才に長ぜしのみならず、能く物理の極微を窮めし深智を有せしこと知べし、かくて年月を過せしが、同十六年安房守病に罹り漸くに革也、左衛門佐帶を解かずして看護し、醫藥を盡し祈禱を竭しけれども其効なく、六月四日終に卒す、左衛門佐悲哀限りなく追孝生るが如し、法名を一翁千雪大居士と號す、（是安房守豫て十二年九月廿一日菩提所高野山遠華定院に自ら逆修として夫人と僧に位牌を建立せし法名なり）遺骸は邸内に葬れり、即ち今の墓所是也、扨孝子の喪に在、駟の隙を過るが如く、早小祥大祥の忌も

過、十八年に比に至れば時勢漸く迫り、天下は風雲穩ならず、國主淺野但馬守は初より關東の内命を受、偵吏をして終始其動靜を窺はしめけるゑ、遂に刺客を遣して暗殺せしむ、刺客反て大助に捕へられ、父子の仁智に感じて心服せしと云、同十九年右内大臣秀頼公大坂に兵を擧るや、奉書を以て聘すること慇懃なり、夫蛟龍時に蟄すと雖ども豈終に池中の物ならん、決然起て舊臣を招集す、檄に應じて子來する者百五十餘人、皆一騎當千の驍勇にして左衛門佐の爲には皆死せんとを願ふ烈士也、平素仁愛惻怛の深きゑ非ざんば焉ぞ能く茲に至らん、又高野領の地士ゑして當郷及近在に住する者、風を望て馳集る、奥出羽守、同彌兵衛、中橋勘之允、高坊常徹、喜多源助、山本角左衛門、田所庄右衛門、平野八郎右衛門尉、城孫右衛門、中勝之助、龜岡帥、等

百五十四人、又高野山五大院刑部、智莊嚴院應政、此両僧は木村長門守に屬し若江にて戦死せり合せて三百餘人を得たり、此時所持せし田園器財等悉く村民に分ち與へしといふ皆勇氣勃々白晝隊伍を作して九度山を發し大坂城に入る、紀見越ならん國主及び沿道の領主等敢て拒む者なく手を束ねて傍觀せり、徳川公平生兵田氏の大坂に入らんとを深く憂へ淺野氏に命じて監視せしむるのみならす其兄伊豆守に命し密に説て徳川家に仕へしめんとせしかども病と稱して固辭しければ伊豆守然らいせめては大助を取立んと勧むれども是亦出家せしむる所存なりなど偽りて謝絶したり伊豆守もよもや同胞の間に詐言も有まじとて空しく還れりと大坂には淀君淫縱にして大野治長之に媚附して柄を執り、秀頼公は有れども無きが如く、文武の政令壹に此淫婦奸臣より出、忠言渾て防遏せられければ、數萬の兵ありと雖も是數萬は心にして更に一和せず、金城湯池ありと雖ども、貳心の者多くして大患蕭牆の内にあり、かく累卵よりも危き城中に左衛門佐の入しは、或は成敗の機に暗きが如く見ゆれども決して然るに非す、危ふければこそ入たるなれ、若し左衛門佐にして一身を圖るなりせば、夙に關東に從ふて封侯を得たりしなり、封侯我に於て何かあらん、唯義富嶽よりも重し、是を以て一身塵芥よりも輕く、虚名只人の評に任せんのみ、實に危きを見て命を授くとは此公の謂なり、されば、かの愚昧の輩の約束を受るとを喜ます、本城第一の衝に當る玉造の阜に別に砦を築きて偃月城と名け之に居る、世之を真田の出丸と稱す、東西の二門を開て信州の遺民を募りけるに舊恩を懷ふて慕ひ來る者又百五十餘人を得たり、乃ち秀頼公より附せられし伊木遠雄、山川賢信、北川宣勝、等五十人を合せて之を守る、先策を建て曰、徳川氏天下の兵を徴して來り攻んとす、坐して之を待は勝算なし、今や關東北國の兵強半は未だ至らす、此時を以

て秀頼公天王寺に出陣し玉ひ、森勝永と臣を以て先鋒として山崎に赴き、長曾我部盛親、後藤基次、を大和路に出して宇治橋を扼し伏見を攻拔、京師に火を縱て大に天下の通路を關ぐべし、然らは西國の諸侯必す來り屬する者あるべしと、淀君大野等危懼して用ゐす、夫小を以て大に敵し、寡を以て衆に勝んとするは、何そ力を較して能はんや、是楠公の敵を京師に縱て糧道を絶んとせしと、事は異なれども奇を用て勝を制する其歸一也、此妙計を拒て用ゐざりしは千古の遺憾限りなし、左衛門佐又後藤と共に建議すらく、德川將軍不日天王寺に至るべし、其未だ陣を布ざる間に敵軍を襲はゞ必す克んと、必勝の計を勸むれども亦用ゐられす、其他明籌奇謀皆擊肘せられて更に蹶足を展すことを得す、かゝる程に天下の兵悉く著し、城の四

外に陣を張、其兵凡五十万人、野に盈山に滿、數里の間、兵ならざるはなく、營ならざるはなし、いかなる金城鐵壁たりとも一日も耐へがたき形勢なり、左衛門佐かゝる大軍を視ること螻蟻の如く、出丸に據て防戰す、此出丸は本城の咽喉に當れは敵を受ること尤多し、皆奇計を以て之を摧き又は自製の大礮を以て之を碎き敵を討と數を知らす、其討て出るや、他の軍に眼を掛す家康公一人を狙ひ、殆んど公を獲んとして逸すること其幾度なるや知べからす、家康公落行路に必す伏兵あり、到る處眞田也と呼はりて公を追窮す、公叢澤に潛み、或は民舍に隱れ、九死に瀕せしを、纔に大久保等に助けられて一生を得たり、されは六文錢の旗幟を見れは、敵疑懼し戰はすして敗走するに至る、此役や叔父隱岐守信尹從ふて東軍に在、家康公命じて左衛門

佐を説降さしむ、隱岐守出丸に至り面會して家康公の意を陳、頻に降を勸む、左衞門佐答て曰、關原の役、臣父子西軍に屬し、寡兵を以て大軍に抗し、西軍の敗るゝに及て山野に遁れたり、然るに秀頼公、臣が陋劣を以てせず、猶數千の兵を授けて一面の將たらしめ玉ふ、是臣を知れは也、古に云士は己を知者の爲に死すと、臣死すとも負くと能はすとて叔父を返しけり、家康公再び遣して若降りなは信州を宛行ふべしとて又勸むると切なり、左衞門佐曰、幸村一死秀頼公に報するの外を知らす、若東西和平するの日には叔父の許に寄食すべし、縱ひ日本の半を賜はるとも、德川公の命に從ふと能はす、叔父還て此由を述、家康公に謝せられて復た來り玉ふと勿れと、其志確乎不拔也、隱岐守又空しく還り、今は家康公に謝するの言なしとて、將に自殺せんとするを、公慰めて之を止めけり、抑左衞門佐度々の合戰に毎に大敵を破ると、固より奇計に因ると雖ども、穴山增田深谷三好等の股肱を始とし、以下輕卒に至る迄皆勇猛にして一人の義に背く者なく、全く一心となりて團結すれは、其進退一體の如し、されは少數を雖ども金鐵よりも堅く、其銳鋒磐石と雖ども破碎せすと云となし、是豈訓練のみを以て能く此に至らんや、誠に仁德に感じて中心悅服すれは也、翌元和元年再び兵を擧るや城内大に戰備を議す、諸説紛々底止する所なし、時に左衞門佐進て曰、今日の事、兩言にして決せんのみ、戰ふべし守るべからざる也、急に京師を襲ひ、天子を狹て以て天下に令せんのみ、此他に勝算あるとなしと、是今年は諸砦皆撤し、外濠悉く埋められ、凴々として孤城のみ孤立し、昨年とは其勢大

に異りければ、又變に應じて此大計を建し也、然るに大野輩亦之を用ゐざ、坐して敵を待、終に滅亡を招くこそ愚にも亦殘念なれ、其戰を始むるや、左衛門佐大軍を破て家康公に迫ること數回、殊に平野の火攻は最も猛烈を極め、百雷地を裂て發し、炎々天を焦し、人馬悉く微塵に碎けて燒盡せり、家康公半身燬爛れて倒る、大久保彦左衛門抱て走り、泥中に潛て纔に息を繫ぐ（一説に此時大御所既に絶命し大久保一騎の來るあり亦敵かと戰栗して潛みなかられ能はざ茫然たりし所へ堤上一人泥水の中にて死骸を抱へ奈何ともすること能はざ茫然たりし所へ堤上一人泥水の中にて死骸を抱へ奈何ともすること能はざ茫然たりし所へ堤上一人泥水の中にて死骸を抱へ奈何とも

蛇ひければ是仙崖の片倉小十郎なりければ大に安堵し其實を告深く大御所の死を秘し味方にさへ漏さゞりしと云又一説に大御所眞田に追窮せられて進退窮まり大久保等輩興に乘せて落行る途に後藤來かゝり怪しみて一鎗突込しことあり此時討れ玉ひしとも云かゝる大變に遭ながら東軍擾亂せずして終に凱歌を奏するに至りしは怪むべきなれども全く能く秘して洩さざりしに因るか、る例なきに非す近くは天正元年正月武田信玄德川家の野田城を攻し時外城既に陷り僅に內城に據て死守す武田方は三方が原の勝利に勇み立其勢當るべからざる落城眼前にあり城中邨松某夜間城樓に上りて笛を吹ければ寄手數騎出て城濠を隔て、之を聽竿を立て去れり明旦城中より之を望みみ鳥居某密に彼竿を踏て夜に入を待邨松又笛を吹寄手

果して出て聽鳥居卽ち一騎を遣せり明日寄手より使を遣し退城を諭す城將菅沼定盈松平忠政等其終に守るべからざるを度り退城しけるに伏兵に遇て捕へられたり然るに信玄病と稱して歸陣する途中にて卒す是笛を聽て丸に中り其創を病て死に致りし也されど深く喪を秘し其弟逍遙軒信綱容貌信玄に肖たるを以て信玄と稱しけれは敵國絶て知る者なし後一年計を經て甲斐の軍振はざるに依て敵國の推知する所となれり夫四境皆敵國たる武田家さへ猶斯の如し況や天下を一統し威權千古其比なき德川氏のとなれば或は其說の實なりしや亦知るへからす猶考證を待べし夫左衛門佐の、雲霞の大軍には目も掛ぎして、獨り家康公を狙ふは、かの能登守の、義經と死を決せんとするの類に非ず、教經の義經に於るは、只冥途の土產に其首を携へんと欲するに在、左衛門佐は否ら、天下は諸侯大抵は皆豐臣家の舊恩あるもの也、而して今悉く敵となるは、唯家康公一人の威望に屈する故のみ、因て公一人だに討取なば、忽ち瓦崩して諸侯心を翻さんと必定也、是を以て片桐且元、遠謀を懷き唯無事を圖り、竊に公の命數を計りて彼難題を甘じ、靜に時を待んと欲せしなり、然る

を淫婦奸臣等其深智を窺ふと能はず、家康公の詭謀に陷りて、柱石たる片桐を逐出せり、扨又此戰に及てや、左衛門佐の大計を用ゐず、行として凶ならざるはなし、然れども左衛門佐の才畧、能く變に應じて奇計湧出、猶此快戰をなす、其神智實に測るべからざる也、かくまで力を竭して敵を破ると雖ども、城内妖雲塞て更に瑞祥を見ず、是に於て最後の一戰に雌雄を決せんと欲し、固く約して其部署を定め、秀頼公の出馬を促がして士氣を奮はし、大に戰ふて敵を擊破らんと決心し、先進て茶臼山に陣し、中軍の出るを待、時に大野敵の偽計に陷り、秀頼公の出馬を止めければ、計策全く齟齬し、前軍皆後を顧みて城内異變ありと訛傳し、軍氣大に阻喪するに至れり、左衛門佐慨然として大助を召て曰、吾族東軍に在を以て治長常に我を疑ひ我計策を用ゐず、今日亦勝算を失せり、我今此に死すべし、汝還て秀頼公に侍し、吾赤心を告よとて己に心を決せしかば、大助止りて俱に死せんとを請ふ、左衛門佐叱して曰、汝此所に死せば誰か我志を明さん、早く還りて秀頼公を守護し、必ず公と死を俱にすべしと強て返せり、大助涙を拂ひつつ、去て城に還る、是に於て、左衛門佐奮戰縱横、幾たびか敵軍を破て終に戰死す、時に年四十六、城内又は秀頼公櫻門に在て胡床に據れり、大助馳還て父の遺命を叙ぶ、其語未だ畢らざるに、早潰兵大に乱れ入、又城内敵に應ずる者有て火を放てり、炎焔城内に蔓り、秀頼公遂に避る所なく、園莊の倉中に入玉ふ、大助隨へり諸將諭して曰、舊臣すら逃れ出る者あり、子は客將の子なり、何ぞ必しも命を捨るに及ばんや、早く遁れ出べしと、頻に勸むれども、我父必ず

秀頼公に殉せよと命ぜりとて、倉外に藁を藉き、食せざして秀頼公を守護すると一晝夜、城終に陷り秀頼公自刃し玉ふを見て即ち自殺す、時に年十六、或は十五とも云大助童児にして能く兵を用ゐ、戦功尤多し、生長の後は父祖に劣らぬ名將となるべかりしを、不幸にして茲に至る、誠に惜むべし、又大助父の命を重んじ、一意秀頼公を守護して殉死す、其忠其孝父祖に愧ぢざるの舊主を殄滅して子孫の榮を計るの徒、盍ぞ大助を見て慙死せざる、左衛門佐幸村秀頼公を供奉して潛に薩州に落行しこと口碑に傳はり稗史大抵此説を取れり是決して齊東野人の語として棄べからざる幸村の大抜に戦死せしこと數回是皆所謂影武者なれは最後茶臼山の戦死も穴山小助なりしといふ薩州に真田の舊跡あり地藏尊を祀れりといへば此説或は真ならん但徳川氏の世に成れる史傳筆を枉げしもの定めて多からんなれば事實の湮沒せしもの幾許なるや知るべからず扨左衛門佐の夫人九度山に在て捕へられけるが赦されて歸り、遂に髪を削りて佛門に入、安房守以下の菩提を訪ひて此地に終りけり、又安房守の息女お市の方、此地にて生れ、生長の後妻木彦右衛門に嫁す、高野山蓮華定院過去帳に龍顔宗白といふ法名あり慶長十一年七月六日真田左衛門佐幸村殿建立と記して俗名を戒せざ想ふに豫て後年を慮り自から道修の位牌を納めしものならん同院に左衛門佐の遺物兜太刀及安房守の太刀并に其筆に成れる太閤の肖像あり其他真田家の書畫等多し中に尼姿の小幅あり上に和歌及ひ六字名號を書す歌に曰みたにはにしに有あけの月にねぶるのあけはの、空傳へ云自ら其毛髮を絹に織込しものの也と傍に源龜子玉川氏と附記す未だ其事歴を考へざ書筆決して凡なら○又此村の大字慈尊院は慈氏寺あり是弘法大師母公の靈蹟なり此寺の七社明神の神寶に左衛門佐寄附せし片山一文字の太刀一口あり爾來百餘年を經て、大安上人と云大徳の僧あり、上人諱は戒圓、當郷に住人岡久兵衛尉盛重の三男にして元祿七年に生る、其先は楠家に遺臣岡權守本姓湯浅に出、上人幼にして信佛の心深く、高野山に登りて西生院辨榮阿闍梨に師事して習學す、阿闍梨其凡庸ならざるを見て、大に悅び、撫育薫醸視ると猶子の如し、十五歳にして剃染し、沙彌の十戒七十二の威儀等を受、戒行堅固、繩錐を勉め、遂に西院流の傳法を受、

其後山川を跋渉して無相空寂を觀念し、又檀波羅蜜を行じて慈悲飛走に及ぶ、一時南都に遊て求聞持法を修し、京洛に留まりて兩部の大法を學ぶ、十九歲にして妙經八軸を講讀し、若學練行凡て十三年、終に內外の秘奧に貫徹す、壯歲にして阿波の龍光寺天滿宮別當職に補し、住すること數年、職を弟子に讓りて故鄉に歸り自性院（今九度山部落東端の墓地の上に其舊趾有）に住す、時々遠近を遊行して法を說利益を施し、其法雨に浴するもの擧て數ふべからざる、一日大坂難波橋上にて盲人に遇へり、上人之を憐み土砂を加持し、光明眞言を唱へ、淨水を以て洗はしむ其他蹇者を起し、病者を救ふ等、加持の妙力窺ひ知べからざる、享保十二年春、四國の僧淨空と云者來り謁して曰、貧道諸國を巡廻するに未だ上人の如き大德を見ざる、我今一の佛像を建立せんと欲す、願くは上人功德廣大の靈尊を示し玉へと、上人輒ち大慈大悲六道能化佉羅陀山の地藏薩埵を勸む、淨空歡喜して薩埵の石像を造立し、上人に請ふて導師とし、開眼供養を營めり、翌十三年上人先師順盛房の旧室に地藏尊を安置し崇敬最も篤し、一夜夢に遊行して蓊蔚たる森林の中に入けるに地藏尊影現して告て曰、此地は淸淨無碍の地、卽ち地藏の淨土也、汝宜しく佉羅陀山の善名稱院を建立すべしと感得す、覺て上人不思議の思をなし、翌日索めて夢に至る所の地に到れり、草を分て入ければ、寶篋印塔一基あり、是則眞田氏の旧跡にして安房守の墓所、孝子左衞門佐の建る所也、上人益々感喜し、草を刈り樹を伐りて地を夷げり、此時松樹一本を墓側に殘す、卽ち今の眞田松と稱するは是也、かくて其地に一宇の伽藍を創建し、寛保元年八

月十八日本尊を移し奉り、因て佐羅陀山善名稱院と號す、左衛門佐の後室卒して後百年餘墓地を掃ひ香花を手向る者絶しにより草莱に埋沒して人の知らざる迄至りしならん門の両楹に二句の頌文を書して曰、無佛導師應現住處、一切衆生入解脱門と、掲げて以て長夜の衆生に示し、朝昏勤行益々勉む、時に上人又夢に安房守の神靈現じて忿怒の相を顯すを感ず、因て神靈を地主大權現と崇め、阿彌陀佛を本地として寺内に勸請せり、一夜又安房守衣冠儼然、手に弓箭を持し、影現して告て曰、上人我を地主權現と崇む、我上人の法施に依り衣食充滿す、其法酬として永く此に地主となり、此淨土を守護すべしと誓約し玉ひしより、上人愈々崇敬して供養せり、上人又靈告を蒙り、稻荷大明神、金毘羅大權現、天滿天神を勸請し、且舍兄総左衛門、住吉大神の御影を寄付せしに依り、合して五社を祀り、鎮守とす、社殿今儼然たり、上人其時の諷誦文に曰、我生々世々隨本尊衆生濟度之後、本尊歸正覺位吾亦當至正覺位云々寶暦の末に至て、年來加持せし土砂積て五十石に餘りければ、上人如意寶藏を建立して之を納めんと欲し、自ら勸進の文を書し普く有縁の信施を募りけるに、遠近競ひ來りて淨財を投じ、或は土木を助け、寶藏日ならずして成就す、今土砂堂と稱する是なり、乃ち土砂を納め、其屋上の寶形に青白二粒の佛舍利を藏め、畫師岡右衛門をして兜率内院の彌勒慈尊を彩繪せしめ、上人自から睛眼を点じて本尊とし、衆生に結縁を爲さしむ、弟子等上人の壽像を納めんとを請ふて已まず、依て右の畫師に命じて寫さしめ、上人自から點眼す、上人の德輝遠近に耀き、遂に叡聞に達するに至れり、明和年間小野御所の奏請に依て上人號を勅許せ

られ、竹園雲客多く歸信せらる、安永二年閏三月三日より五日間如意寶藏の供養を執行しけるに、遠近參拜するもの堵の如く、嵯峨御所より御紋附の紫幕及提燈等御寄付あり、此時れ群集當郷前代未聞也、又光勝院宮御紋附の梵鐘を寄進し玉ひ、朝夕衆生の迷夢を驚覺す、此年仲夏十九日上人諸弟を集めて遺教し、翌廿日結跏趺坐し、手に密印を結びて入寂す、時に八十歳也、其法化を受し緇素、聚り來て悲嘆すること、娑羅雙樹下の涅槃會もかくやと思ふ計りなり、さて弟子等遺骸を境内に納め、寶塔を築き、其上に廟室を建て奉仕尤慇懃なり、即ち今の靈廟是也、爾來法燈連綿、中世より尼僧住寺となり、今猶如律堅固の尼法師法燈を挑げ眞田氏の墓所を守れり、因て住職は眞田の苗字を冒す

眞田氏一德齋より代々智謀拔群を以て稱せらる、左衛門佐に至て古今に獨歩し、其智小は物理の極微より大は天下の經畧掌中に在り、其仁下は民を愛し臣を撫し、上は忠孝の大道に任じ、丹誠日月を貫き、其勇刀槍を振ては前に敵なく、百萬の軍に臨ては能く之を齏粉す、實に三德兼備の良將、千載一出の俊傑也、其匹之を異域に求むれば唯諸葛武侯、本朝に尋ぬれば獨楠中將あるのみ、但其境遇を異にす、是を以て功業同じからず、三將地を易へば皆然らん、余善名稱院に詣り、楠公の位牌を拜して其奇緣に感じ、益々其易世の友たるを信ずるなり、左衛門佐をして承久正平の世に生れしめば、令聞廣譽萬世に赫々たるべきりしを、惜哉大坂危乱の際に會し、其功空しく湮沒せしと、又且大坂に在て總督の任に當らしめば恢復の功豈期すべ

からざらん、哀哉儻々一方の部將たるに過ず、剩へ城中一和せず籌策悉く掣肘せられて蹟足を展すとを得ず、夫かゝる位地を甘し碌々の輩と伍するとを厭はざりし心中、果して如何、唯節に死するの志堅固にして復た他を顧るに遑あらざるなり、誠に左衞門佐は君子と謂べし、百世其事蹟を聞く者亦以て興起するに足らん今は路に富る者若し此公の才智と德行と節義とあらば邦國復た何ぞ憂かあらん噫斯君子にして未だ墓碑とてはなし德川氏の世はいさ知らぞ

今や憚る所なき大御代となりて猶思ひの玆に及ぶものなきは殘念ならずや安房守は松代侯の世代に入て廚食絶えざれども獨り左衞門佐夫妻及一子大助の祀を奉するものなし他日有志を募て墓碑を當院に建立せんと欲す

訪真田氏舊跡有感

姑射山人

蒭鬱南山麓、凜冽紀水澳、薜蘿鎖柴門、松篁繞茅屋、沽劍買耒耜、放馬飼牛犢、二頃猶有田、數口足畜僕、閑居十五年、竊嘆牌生肉、

山河夕照多、滿胸感萬斛、何日驅三軍、爭彼中原鹿、三分策既迂、一統計粗熟、風雲未際會、蛟龍久蟄淵、一朝駕雷電、決起翔北天、雲霞百萬敵、四面山野塡、吶喊金城動、乱礮鐵壁穿、靜坐城樓上、瞥見戰方闌、時下一聲令、鏖殺幾百千、奇兵忽湧出、突進衝中堅、大將大狼狽、單騎走且躓、林間伏俄起、奮迅頻追躡、大將無生氣、屏息潛澤叢、平野原頭夕、百雷發地中、乾坤欲顚覆、炎炎焦大空、憶起赤壁火、燒盡百萬衆、千古一快戰、猶見難波東、天命且無定、時運有衰隆、一城人不和、惡乎期成功、茶臼山樹下、顧待大旆來、金瓢將欲出、躊躇還引回、慷慨此兒遣、決然突巨魁、血戰幾十合、所向微塵摧、菊水旌折後、聖運終不開、錢紋旗仆日、金城即傾頹、屍朽原草露、功沒舊墟苔、丹心貫日月、英靈安滅哉、一帶紀川水、玲瓏萬世清、白虵長怒叫、透迤向西行、一幹老松樹、巍々千秋榮、

飛龍常踊躍、凌雲護墳塋、松如標操節、水似寫心情、英魂永不滅、
神靈在天明、諸看戊辰役、即是難波城、忽假王師力、一舉殲東兵、

○當九度山の地は紀伊國伊都郡の中点に位し北は紀の川に瀕し南西二方に丹生川の流を帶び東一方陸地に續く恰も半島の如し戸數慶長の頃は五十戸計りなりしと云今は當郡中第一の多數を占め七八町の街道商店軒を並ぶ旅店中最も舊家にして今に盛大なるは森屋なり通稱森勘とよぶ　皇族方始貴顯紳士は必ず此屋に立寄宿泊又は休憩あり部落の東一町計に槇ノ尾神社あり陰森たる樹林の中に在り其北に糸の細路といへるあり昔時中將姫の雲雀山へ行し時通りし路なりと云九度山の名は往昔此地瓦を燒を以て渡世としたりし故竈卽ちくゞ山と云しといふ又は此地より高野山蓮華院學文路等諸方へ通する便あるを以て九道山なりとも云

○當地より西八町計に慈尊院あり是弘法大師母公の靈跡也夫より町石道傳ひ登ること六十町計にて天野神社に至る又夫より六十町計山の頂上を傳ひ行は矢立に至り矢立より五十町漸く登れは高野山の大門に至る其間袈裟掛石捻石押揚石鏡石等の名所あり

○又當地より椎出を經て登ること二里計にして神谷辻に出茲にて上方街道に合し登ること一里計にして高野山一心院口女人堂に至る其間四寸岩極樂橋不動坂外の不動岩不動兒が瀧花折坂等の名所あり

○又當地より紀の川を渡り西に向へは四里計にして粉河寺あり夫より二里計を行は根來寺に至る根來より四里計西南に向て紀三井寺あり夫より十町餘り舟にて西へ渡れは和歌の浦なり和歌より北一里に和歌山あり夫より西三里にして加太浦に至るなり

○又當地より東へ十八町にして學文路村石童丸の舊跡あり又三十町計東清水の邊より北に渡れは橋本驛なり此より北に向へは紀見峠を越て河内に入り大坂京都に達す又東に向へは大和に入るなり

明治廿七年四月十一日印刷
明治廿七年四月廿一日發行

定價金七錢

和歌山縣紀伊國伊都郡高野村大字高野山三百八十九番地
著作兼發行者　井村米太郎
同縣同國同郡九度山村大字九度山千五百五十番地
印刷者　森口徹三郎
同縣同國和歌山市久保町壹丁目二十九番地
印刷所　爲森商店印刷部

發賣所　九度山文運堂　今川留七
仝　高野山經久事　前岡久五郎

版權所有